病害虫発生予察情報（８月予報）

令和５年７月26日
静岡県病害虫防除所長

１　予報概況

作物名	病害虫名	予報 （８月の県平均平年値）	予報の根拠
稲	葉いもち・穂いもち	発 生 量：少 （葉いもち発病株率 2.4%） （穂いもち発病株率 0.3%）	７月中旬葉いもち発生量: 少（発生なし）（－） 気象予報：気　温:高い　（－） 降水量：ほぼ平年並（±）
	紋枯病	発 生 量：並 （発病株率 7.2%）	７月中旬発生量:少（発生なし）（－） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並（±）
	ごま葉枯病	発 生 量：多 （発病株率 14.7%）	７月中旬発生量：多　（＋） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並（±）
	稲こうじ病	発 生 量：並 （発病株率 0.5%）	昨年９月発生量：多　（＋） 気象予報：気　温：高い　（－） 降水量：ほぼ平年並（±）
	トビイロウンカ	発 生 量：並 （寄生虫数：0.05 頭／株）	７月中旬発生量:少（発生なし）（－） ７月予察灯誘殺数：少　（－） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並（±）
	斑点米カメムシ類	発 生 量：やや多	７月中旬発生量：並　（±） ７月予察灯誘殺数：並～多（±～＋） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並（±）
	コブノメイガ	発 生 量：やや少 （被害株率 2.6%）	７月中旬発生量:少（発生なし）（－） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量:ほぼ平年並　（±）
	イチモンジセセリ （イネツトムシ）	発 生 量：やや多 （25 株あたり寄生数 0.5 頭）	７月中旬発生量：並　（±） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並（±）
かんしょ	ナカジロシタバ	発 生 量：やや少 （寄生虫数 0.1 頭/m^2）	７月上旬発生量：少　（－） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並（±）
	イモキバガ （イモコガ）	発 生 量：並 （巻葉数 10.7 葉/m^2）	７月上旬発生量：やや少　（－） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並（±）
	エビガラスズメ	発 生 量：並 （寄生虫数 0.05 頭/m^2）	７月上旬発生量：並（発生なし）（±） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並（±）

作物名	病害虫名	予報 （８月の県平均平年値）	予報の根拠
温州 みかん	黒点病	発 生 量 ：並 （発病度 0.8）	７月中旬発生量：並　（±） 気象予報：気　温：高い　（±） 降水量：ほぼ平年並（±）
	ミカンハダニ	発 生 量：やや少 （寄生葉率 4.6%）	７月中旬発生量：並　（±） 気象予報：気　温：高い　（－） 降水量：ほぼ平年並（±）
	チャノキイロ アザミウマ	発 生 量 ：やや少 （寄生果率 0.1%）	７月中旬発生量：少　（－） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並（±）
中晩柑類	かいよう病	発 生 量：並 （発病度(果) 0.3）	７月中旬発生量：並　（±） 気象予報：気　温：高い　（±） 降水量：ほぼ平年並（±）
なし	ハダニ類	発 生 量：少	７月上旬発生量：少　（－） 気象予報：気　温：高い　（±） 降水量：ほぼ平年並（±）
	ナシヒメシンクイ	発 生 量：やや少	７月上旬発生量：少　（－） フェロモン誘殺数：やや少　（－） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並（±）
かき	フジコナ カイガラムシ	発 生 量：やや少 （寄生果率 1.1%）	７月中旬発生量：少　（－） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並（±）
	ハマキムシ類	発 生 量：並	７月中旬発生量：やや少　（－） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並（±）
果樹全般	カメムシ類	飛 来 数：やや少	７月中旬誘殺数：少　（－） ヒノキ・スギ球果着果量：やや少　（－） ヒノキ球果寄生数：少　（－） ヒノキ球果吸汁痕数：少　（－） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並（±）
茶	炭疽病	発 生 量：やや少 （病葉数 22.8 葉/1.25m^2）	７月上中旬発生量：少　（－） 防除員からの報告：多　（＋） 気象予報：気　温：高い　（±） 降水量：ほぼ平年並（±）
	輪斑病	発 生 量：並 （病葉数 4.5 葉/1.25m^2）	７月上中旬発生量：やや少　（－） 気象予報：気　温：高い　（＋）
	新梢枯死症	発 生 量：やや少 （発症枝数 5.6 枝/1.25m^2）	７月上中旬発生量：少　（－） 気象予報：気　温：高い　（＋）
	チャハマキ	発 生 量：やや少 （寄生虫数 0.7 頭/1.25m^2） 発生時期：並～早い	７月上中旬発生量：少　（－） 第１世代成虫発生量：並～多（±～＋） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並（±）
	チャノコカクモン ハマキ	発 生 量：やや少 （寄生虫数 0.7 頭/1.25m^2） 発生時期：並～早い	７月上中旬発生量：少　（－） 第１世代成虫発生量：並～多（±～＋） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並（±）

作物名	病害虫名	予報 （８月の県平均平年値）	予報の根拠
茶	チャノホソガ	発生量：少 （巻葉数 1.1 葉/1.25m2）	７月上中旬発生量：少　（－） 気象予報：気　温：高い　（－） 降水量:ほぼ平年並　（±）
	チャノキイロ アザミウマ	発 生 量：やや多 （叩き落とし虫数 11.0 頭/4 カ所）	７月上中旬発生量：並　（±） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量:ほぼ平年並　（±）
	チャノミドリヒメ ヨコバイ	発 生 量：やや多 （叩き落とし虫数 1.0 頭/4 カ所）	７月上中旬発生量：並　（±） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並（±）
	ヨモギエダシャク	発 生 量：多 （叩き落とし虫数 0.1 頭/4 カ所）	７月上中旬発生量：やや多　（＋） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並（±）
	クワシロ カイガラムシ	発 生 量：やや多 （寄生株率 1.9%） 発生時期：早い	７月上中旬発生量：やや多　（＋） 気象予報：気　温：高い　（±） 降水量:ほぼ平年並　（±）
きく （施設）	黒斑病・褐斑病	発 生 量：やや少 （発病株率：0.5%）	７月下旬発生量:少(発生なし)（－） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並（±）
	アザミウマ類	発 生 量：並 （被害株率：14.7%）	７月下旬発生量：やや少　（－） 気象予報：気　温：高い　（＋）
作物全般	ハスモンヨトウ	発 生 量：やや少	フェロモン誘殺数：やや少　（－） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並（±）
	オオタバコガ	発 生 量：並	フェロモン誘殺数:並～少　（±～－） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並（±）

表の見方について

- 予報の発生量は平年（静岡県の過去 10 年間）との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
- 予報の発生時期の記載がある場合は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年（静岡県の過去 10 年間）との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の 5 段階で示しています。
- 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況（調査時期と発生量）、気象庁の1か月予報（気温と降水量）を記入しています。その状況が多発要因の場合は（＋）、少発要因の場合は（－）を示し、＋－を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

農薬情報はこちらで検索！

静岡県農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準

https://www.s-boujo.jp/

２　予報の根拠と防除対策

【稲】

＜生育の概況等＞

巡回時の生育は、早期栽培が幼穂形成期～開花期、普通期栽培が分げつ期～幼穂形成期であった（調査期間：７月 11 日～18 日）。病害虫防除員からのアンケート調査によると、生育は平年よりやや早いまたはやや遅い地域があるが、概ね平年並であった。

●葉いもち・穂いもち

予報の根拠

・７月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率 2.3%）。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生を特には助長しない（感染好適条件：気温 15℃～25℃、葉面湿潤時間 10 時間以上、前５日間の平均気温が 20℃～25℃を全て満たす時）。

防除対策

・育苗箱処理剤の残効は出穂期頃までなので、効果の切れた時期以降で、本病の発生に適した雲雨天で日照不足が続く場合は注意が必要である。

・上位１～３葉に病斑が見られる場合は、適期（穂ばらみ期～穂揃期）に必ず防除を実施する。特に、急性型病斑（病斑周辺部に褐色部分が少なく、病斑が暗緑色あるいはねずみ色）が多いときには、速やかに薬剤散布をする。

・常発地では薬剤の予防散布を行う。

・本県では MBI-D 剤耐性いもち病菌が発生している。また、近年、他県では QoI 剤耐性いもち病菌が発生し問題となっており、本県でも発生が懸念されるため、耐性菌の発生リスクが高い薬剤を使用する場合は、連用を避けるなど適切に使用する。詳細は日本植物病理学会殺菌剤耐性菌研究会ホームページの「殺菌剤使用ガイドライン」（http://www.taiseikin.jp/guidelines/）を参照。

●紋枯病

予報の根拠

・７月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率 0.9%）。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する（本病原菌は生育適温 28～32℃と高温を好む）。

防除対策

・水田等で越冬した菌核が一次伝染源となるため、前年発生したほ場では発生しやすい。発生が見られた場合はすみやかに薬剤防除を行う。

・病斑が上位葉鞘まで上がると減収の要因になる。特に過繁茂となっているほ場では多発しやすいため注意する。

●ごま葉枯病

予報の根拠

・７月中旬の巡回調査では、平均発病株率は 13.4%（平年 3.0%）と平年より多かった。

・出穂期以降登熟期までの高温は、イネの老化と病原菌の活動を促すため、本病の発生が多くなる（病原菌の生育適温：25～30℃）。１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する。

防除対策

・肥料切れにより発生が助長されるため、穂肥を適切に施用する。

・出穂期以降に高温・多湿が続いた場合には、葉の斑点のみならず穂枯れを起こすので、葉に病斑が見られる場合は穂ばらみ期～穂揃期にかけて薬剤散布を行う。

●稲こうじ病

予報の根拠

・昨年９月の巡回調査では、平均発病株率は 3.6%（平年 2.0%）と平年より多かった。

・本病は穂ばらみ期頃の低温・多雨により発生が助長される。１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生を特には助長しない。

防除対策

・本病は収穫時に落下した病粒に含まれる多量の厚壁胞子が土壌中に残り、翌年の伝染源となる。このため、常発ほ場では注意が必要である。

・本病の薬剤防除は予防散布が基本であり、適期は穂ばらみ期頃である。常発ほ場では、適期に薬剤防除を実施する。

●トビイロウンカ

予報の根拠

・７月中旬の巡回調査では、本種の寄生は認められなかった（平年最高寄生数 0.002 頭／株）。

・県内４ヶ所の予察灯における７月第３半旬時点の誘殺数は、磐田市加茂で平年より多く、他の３ヵ所で平年より少なく推移している。予察灯による調査結果の詳細は静岡県病害虫防除所ホームページ参照。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・例年、８月以降に発生量が増加する。

・本虫は世代交代を繰り返すことで急激に増殖する。特に８～９月に高温が継続する場合は急増し、数が増えてからでは効果が高い薬剤を使用しても十分な殺虫効果が得られず坪枯れを引き起こす場合があるため、予防に重点を置いた防除を実施する。

・本虫に効果の高い育苗箱施用剤を使用していない場合は、ほ場で確認されていなくても既に寄生している可能性があることから、梅雨明け後～出穂前及びその 10～14 日後の計２回の防除を検討する。また、本虫に効果の高い育苗箱施用剤を使用している場合であっても、可能な限り１回目の防除を検討する。

・葉色に注意し、水田内の一部が坪状に黄化している場合は株元を観察し、成幼虫の寄生が確認された場合は直ちに薬剤防除を行う。

●斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ、ミナミアオカメムシ等）

予報の根拠

・７月中旬の水田周辺における雑草のすくい取り調査では、県平均捕獲数は 15.4 頭／30 回振り（平年 17.3 頭／30 回振り）と平年並の発生であり、全調査地点中 44%（平年 55%）の調査地点から斑点米カメムシ類が捕獲された。

・周辺雑草から捕獲したカメムシ類のうち、アカスジカスミカメが全捕獲数の 76%、アカヒゲホソミドリカスミカメが同 11%を占めた。その他、ホソハリカメムシ、イネカメムシ等が捕獲された。

・県内４ヶ所の予察灯における７月第３半旬時点の合計誘殺数は、アカヒゲホソミドリカスミカメが平年より多く、アカスジカスミカメとミナミアオカメムシが平年並であった。予察灯による調査結果の詳細は静岡県病害虫防除所ホームページ参照。

・一部でイネカメムシの発生が確認されている。本種は出穂前後に水田に侵入し、斑点米のほか、乳熟期までの吸汁加害により不稔籾を生じさせ減収を引き起こす。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・斑点米カメムシ類はイネ科やカヤツリグサ科雑草の種子で増殖するため、水田周囲の雑草を除去する。ただし、水稲の出穂間際の除草はカメムシ類の本田への侵入を助長する可能性があるため、出穂 10 日前までに除草を徹底する。

・出穂後は水田内のカメムシ類の発生に注意し、確認された場合は薬剤防除を実施する。特に出穂期が周辺より早い水田はカメムシ類が集中するため、注意を要する。

・穂揃期（成虫侵入期（すべての茎のうち 80%の茎で穂が出た状態））とその７～10 日後（幼虫ふ化期）の２回薬剤散布を行うと効果が高い。粒剤は出穂期に散布する。

・イネカメムシの発生が目立つ場合は、出穂期（すべての茎のうち 50%前後の茎で穂が出た状態）に散布する。

・農林水産省の蜜蜂被害事例調査により、「蜜蜂被害は、水稲のカメムシを防除する時期に多く、水稲のカメムシ防除に使用した殺虫剤（農薬）を直接浴びたことが原因である可能性が高い」ことが報告されたため、養蜂家との情報共有を行う等、蜜蜂への影響に留意し防除を行う。なお、詳細は農林水産省ホームページ（https://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_mitubati/honeybee_survey.html）を参照する。

７月の畦畔・雑草地における斑点米カメムシ類の捕獲頭数（頭／３０回振）

	田方平坦地	東部高冷地	志太榛原	中遠・西部 普通期	中遠 早期	県平均
本年度	１１．０	０．０	２３．４	３３．０	９．６	１５．４
平年	６．２	３．１	１６．６	３０．２	３０．５	１７．３

●コブノメイガ

・７月中旬の巡回調査では、本種による被害株は認められなかった（平年被害株率 0.2%）。

・１か月予報では、気温は高く、降水量はほぼ平年並であるため、本種の発生をやや助長する。

・普通期栽培では出穂前に加害されると登熟歩合が低下するので、８月上～中旬に成幼虫の発生状況を確認する。上位葉を幼虫が食害している場合は直ちに薬剤を散布する。成虫が確認された場合は５～７日後に薬剤を散布する。

●イチモンジセセリ（イネツトムシ）

・７月中旬の巡回調査では、平均寄生数は 0.04 頭／25 株（平年 0.02 頭／25 株）と平年並であった。

・普通期栽培で葉色の濃い水田では被害が集中するので、葉巻の発生に注意し、葉巻内に幼虫が見られる場合は薬剤防除を行う。

【かんしょ】

＜生育の概況等＞

生育は平年並で推移している。

●ナカジロシタバ

予報の根拠

・７月上旬に行った巡回調査では、平均寄生幼虫数は 0.1 頭/㎡（平年 0.3 頭/㎡）と平年より少なかった。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・幼虫は齢期が進むと葉を食い尽くすので注意が必要である。

・幼虫が多数見られるようであれば直ちに薬剤防除を行う。

●イモキバガ（イモコガ）

予報の根拠

・７月上旬に行った巡回調査では、平均巻葉数は 1.7 葉/㎡(平年 2.2 葉/㎡）と平年よりやや少なかった。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・例年、８月は葉の繁茂に伴い巻葉数が増加する。多発生のほ場では、被害が拡大する前に防除を行う。

●エビガラスズメ

予報の根拠

・７月上旬に行った巡回調査では、発生は認められなかった(平年平均寄生幼虫数 0.04 頭/㎡）。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・中～老齢幼虫は１頭当たりの食害量が多いため、若齢幼虫のうちに防除を行う。

【温州みかん】

＜生育の概況等＞

生育は平年より数日早く、着果量は平年並～やや多い。

●黒点病

予報の根拠

・７月中旬の巡回調査では、果実の発病度は 0.57（平年 0.18）と平年並であった。

・１か月予報では、気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並のため、本病の発生を助長しない。

防除対策

・アメダスの気象データを用いた予測に基づいた要防除時期は、７月上旬防除の場合、８月上旬頃、７月中旬防除の場合、８月下旬頃、７月下旬防除の場合、９月上旬頃となる。各産地における要防除時期予測の詳細は、静岡県病害虫防除所ホームページを参照する。

・防除実施日以降の累積降雨量が 250㎜、または防除実施日から 25～30 日経過した時点が次の防除実施の目安となる。上記の要防除時期予測を目安に、栽培地域のアメダスの気象データなどを確認し、累積降雨量が増えた場合は防除を早めて実施すること。

●ミカンハダニ

予報の根拠

・７月中旬の巡回調査では、平均寄生葉率は 8.9%（平年 8.8%）と平年並であった。ただし、一部では多発園地も見受けられた。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生を助長しない。

防除対策

・夏期は天敵（カブリダニ類など）の発生が多くなるが、ミカンハダニが多発している園地（葉あたり３頭を超える園地）では薬剤防除を行う。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

・７月中旬の巡回調査では、本種の果実への寄生は認められなかった（平年平均寄生果率 0.2%）。また、果梗部及び果頂部の被害はいずれも認められなかった（果梗部の平年平均被害度 0.7、果頂部の平年平均被害度 0.1）。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・アメダスの気象データを用いた予測では、今後の気温が平年並で推移した場合、第５世代成虫の発生ピークは７月 30 日～８月 16 日、第６世代成虫の発生ピークは８月 17 日～９月４日と予想される（発生ピーク時期は地域によって異なる）。なお、各地域における成虫発生時期予測の詳細については静岡県病害虫防除所ホームページを参照する。

・薬剤防除適期は各世代の発生ピーク７日前～当日までとなる。各地域の発生ピークを参考に防除を行う。

・樹冠占有面積率 60%以下の園地で、反射率 90%以上の光反射シートマルチを全面被覆すれば、薬剤防除と同等の効果がある。

＜その他の病害虫＞

●ゴマダラカミキリ

防除対策

・病害虫防除員からの情報によると、本種の多発園地が散見されている。成虫の飛来が多い園地では、地際部の樹皮下に産卵された卵や孵化幼虫を対象として、主幹から株元にかけて薬剤散布し、幼虫の食入を防止する。

【中晩柑】

●かいよう病

予報の根拠

・７月中旬の巡回調査では、果実の発病度は 0.30（平年 0.19）と平年並であった。

・１か月予報では、気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並のため、本病の発生を助長しない。

防除対策

・本病は雨媒伝染し植物体の傷口から感染するため、台風などの強風を伴う雨によって感染が著しく助長され、急激に多発する場合がある。防除においては気象情報とほ場の発生状況に注意し、感染拡大を防ぐよう降雨前の予防に重点を置く。

・ミカンハモグリガの加害による傷は、感染を著しく助長するため防除する。

【なし】

＜生育の概況等＞

生育は平年より数日早く、果実の肥大は平年並～良い。

●ハダニ類

予報の根拠

・７月上旬の巡回調査では、発生は認められなかった(平年平均寄生葉率 3.7%）。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、発生を特には助長しない。

防除対策

・発生園地では収穫前日数に注意して防除を行う。

・葉当たり雌成虫密度１～２頭（寄生葉率 20～40%）が防除の目安である。

●ナシヒメシンクイ

予報の根拠

・７月上旬の巡回調査では、発生は認められなかった(平年平均被害果率 0.02%）。

・浜松市内におけるフェロモントラップへの誘殺数は、平年に比べてやや少なく推移している。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・例年８月は成虫の発生が多いため、無袋栽培園では収穫時期に注意し、防除を行う。なお、誘殺データは静岡県病害虫防除所ホームページを参照する。

【かき】

＜生育の概況等＞

生育は平年並～やや早く、着果量は平年並である。

●フジコナカイガラムシ

予報の根拠

・７月中旬の巡回調査では、本種の寄生は認められなかった（平年平均寄生果率 0.8%）。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・発生がみられるほ場では直ちに防除する。なお、本種は果実とへたの間に寄生しており薬剤が届きにくいため、丁寧に散布を行う。

●ハマキムシ類（チャハマキ、チャノコカクモンハマキ）

予報の根拠

・７月中旬の巡回調査では、平均被害葉率 0.1%（平年 0.6%）と平年よりやや少なかった。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・地域の予察灯やフェロモントラップにおける成虫の誘殺状況に注意し、適期に防除する。なお、誘殺データは静岡県病害虫防除所ホームページを参照する。

【果樹全般】

●カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ）

予報の根拠

・県内６か所に設置しているフェロモントラップにおける７月１日～20 日の合計誘殺数の平均は、チャバネアオカメムシが 10.0 頭／か所（平年 294 頭）、ツヤアオカメムシが 0.3 頭／か所（平年 5.1 頭）であり、両種とも平年より少なかった。同様にカメムシ類は、11.0 頭／か所（平年 302 頭／か所）と平年より少なかった。

・県内４か所の予察灯における７月１日～20 日の合計誘殺数の平均は、チャバネアオカメムシが 22.3 頭/か所（平年 139 頭/か所）、ツヤアオカメムシが 1.8 頭/か所（平年 16.9 頭/か所）であり、両種とも平年より少なかった。

・繁殖場所であるヒノキ・スギ球果の着果量（結果量指数）は、県平均 3.3（平年 4.7）と平年よりやや少なかった。

・ヒノキ・スギ球果におけるカメムシ類の平均寄生数は、10 結果枝あたり 0.7 頭（平年 2.3 頭）と平年より少なかった。

・７月中旬のヒノキ球果における球果１個あたりのカメムシ類の吸汁痕数は、平均 0.6（平年 1.3）と平年より少なかった。なお、ヒノキ球果における吸汁痕数が 25 を超えると、カメムシ類はヒノキから離脱し、餌を求めて果樹園に飛来する。

・以上をまとめると、７月のフェロモントラップ及び予察灯への誘殺数はいずれも少なく、ヒノキ・スギ球果の着果量はやや少なく、球果における寄生数及び吸汁痕数はいずれも少なかった。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は高いため、本種の発生をやや助長する。
・１か月予報を加味すると、８月の果樹園への成虫飛来数は平年よりやや少ないと予想される。

防除対策

・フェロモントラップ及び予察灯による誘殺数の詳細は、静岡県病害虫防除所ホームページを参照する。
・ヒノキ、スギ林付近の果樹園ではカメムシ類が飛来しやすいため、ほ場の発生状況をよく観察し、発生を確認した場合は防除を行う。

【茶】

＜生育の概況等＞

７月上中旬の巡回調査時では、三番茶芽が生育中の茶園と、二番茶後に浅刈りを行った茶園が多く認められた。また、芽の生育も茶園によりばらつきがみられた。防除員からの情報では生育は平年並～やや遅れている茶園が多かった。

●炭疽病

予報の根拠

・７月上中旬の巡回調査では、平均発病葉数は 7.3 葉/1.25 ㎡(平年 15.3 葉/1.25 ㎡）と平年より少なかった。一方、防除員からの報告では１２名中７名が発生量「多」もしくは「やや多」と回答した。
・本病の感染には新芽生育時に 10 時間以上の濡れが必要である。１か月予報では、気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並のため、本病の発生を特には助長しない。（分生子の発芽適温 22～27℃）。

防除対策

・新芽開葉期に半日以上続く降雨があった場合は、早めに防除を行う。なお、萌芽期～１葉開葉期には予防剤（ダコニール 1000、フロンサイド SC など）を使用することで DMI 剤の連用を可能な限り避ける。

●輪斑病

予報の根拠

・７月上中旬の巡回調査では、平均発病葉数は 15.3 葉/1.25 ㎡（平年 19.0 葉/1.25 ㎡）と平年よりもやや少なかった。
・本病の発病は 25℃以上の高い気温が好適である。１か月予報では、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する。なお降雨の多少は本病の発生程度に影響しない。

防除対策

・摘採や整枝によってできた傷口が発病を助長するため、常発園では、整枝等の作業を行った際には、翌日までに薬剤による防除を行う。

●新梢枯死症

予報の根拠

・７月上中旬の巡回調査では、平均発症枝数は 0.6 枝/1.25㎡（平年 2.2 枝/1.25 ㎡）と平年より少なかった。なお、本症状の原因として輪斑病菌が関与しているものは半数程度であることが判明しており、残りは多雨による水腐れや高温等による生理的な要因と考えられる。

・１か月予報では、気温は平年より高いため、本症状の発生を助長する。

防除対策

・三番茶芽の萌芽期から生育期に、２回程度薬剤を散布する。なお、QoI 剤は、耐性菌が発生しやすいので同一薬剤として扱い、連用を避ける。

●チャハマキ、チャノコカクモンハマキ

予報の根拠

・７月上中旬の巡回調査では、平均寄生虫数はチャハマキが 0.3 頭/1.25 ㎡（平年 0.8 頭/1.25 ㎡）、チャノコカクモンハマキが 0.4 頭/1.25 ㎡（平年 0.7 頭/1.25 ㎡）で、両種ともに平年より少なかった。

・予察灯及びフェロモントラップにおける第１世代成虫誘殺数は、両種とも平年並～多かった。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

・本年は第１世代成虫発生時期が平年並～早かった。第２世代成虫発生盛期は７月下旬から８月上旬と予想され、平年並～早い見込みである。このため、第３世代幼虫を対象とした防除時期は８月上旬から中旬になると予想される。

防除対策

・地域の予察灯やフェロモントラップでの成虫の誘殺状況に注意して適期防除を行う。なお成虫の誘殺数データは静岡県病害虫防除所ホームページで提供している。

・成虫活性のある薬剤（サムコルやディアナ）を使用する場合は、7 月下旬から８月上旬頃に、慣行の幼虫期防除では８月上旬から中旬頃が防除適期と考えられる。

●チャノホソガ

予報の根拠

・７月上中旬の巡回調査では、平均巻葉数は 0.3 葉/1.25 ㎡（平年 1.2 葉/1.25 ㎡)と平年より少なかった。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが気温は平年より高いため、高温により本種の発生はあまり助長されない。

防除対策

・新芽生育期と成虫発生期が合致すると発生が多くなる。

・二番茶後に浅刈りした茶園が多く、そのような茶園では新芽の生育時期が例年とは異なる。そのため、地域の予察灯やフェロモントラップにおける誘殺虫数の推移に注意し、成虫の発生盛期と新芽の生育時期が合致する場合は、新芽への産卵状況に注意し、適期防除に努める。なお成虫の誘殺数データは静岡県病害虫防除所ホームページで提供している。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

・７月上中旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は 13.0 頭/4 カ所（平年 10.6 頭/4 カ所）と平年並だった。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・例年、８月の新芽生育期は発生が増加するので、新芽の萌芽から開葉期に防除を実施する。また、二番茶摘採後に浅刈りした茶園では、新芽の生育時期が通常の茶園とは異なるので、新芽の生育状況に注意し、新芽萌芽から生育期に防除を実施する。

●チャノミドリヒメヨコバイ

予報の根拠

・７月上中旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は 2.7 頭/4 カ所（平年 2.7 頭/4 カ所）と平年並だった。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・近年、８月の発生量は７月に比べ同等かやや少ない傾向である。ただし、新芽生育期は発生が増加するので、新芽の開葉期に防除を実施する。また、二番茶摘採後に浅刈りした茶園では、新芽の生育時期が通常の茶園とは異なるので、新芽の生育状況に注意し、新芽開葉期に防除を実施する。

●ヨモギエダシャク

予報の根拠

・７月上中旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は 0.16 頭/4 カ所（平年 0.11 頭/4 カ所）と平年よりやや多かった。また、茶業研究センターの報告では、予察灯における第 1 世代成虫の誘殺数は平年より多かった。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・例年８月中旬頃から予察灯への成虫誘殺数が増加する。茶園内をよく観察し、薬剤感受性の高い若齢幼虫の時期に防除を行う。

●クワシロカイガラムシ

予報の根拠

・７月上中旬の巡回調査では、平均寄生株率は 1.2%（平年 0.7%）と平年よりやや多かった。

・アメダスの気温データに基づく茶業研究センター（菊川市）の第３世代予想ふ化最盛日は、７月 26 日の計算によると平年より 12 日早い９月１日と予想される。

防除対策

・地域のふ化最盛予想時期に、茶園内のふ化状況をよく観察し、適期防除を行う。アメダス地点の予想ふ化最盛日については静岡県病害虫防除所ホームページで提供している。なお、７月に防除した茶園では、系統の異なる薬剤を使用して防除する。

＜その他の病害虫＞

●カンザワハダニ

・７月上中旬の巡回調査では、樹冠面での平均寄生葉率は 0.4%（平年 0.4%）と平年並だった。1 か月予報では、降水量はほぼ平年並だが気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

・降水量が少なく推移すると多発する恐れがあるため、茶園を観察して発生に注意し、早期防除に努める。

●マダラカサハラハムシ

・一番茶時期に被害が発生したような常発地域では、新成虫が発生する８月中下旬頃の防除を徹底する。薬剤については、「農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準（HP: https://www.s-boujo.jp/）」を参照する。

【いちご】

＜その他の病害虫＞

●炭疽病

・本病の生育適温は 25℃前後であり、高温・多湿条件下で多発生しやすい。

・発病株からその周囲へと伝染しやすいため、ほ場の見回りを徹底し発病株や発病が疑われる株の早期発見に努める。発病株はビニール袋に入れ圃場外へ出し、殺菌処理をしてから残渣を処分する。

・本病原菌は水滴の飛散によって伝染するため、株元潅水など水の跳ね返りを防ぐ形で潅水を行う。また、薬剤散布も同様の伝染条件を作り出す可能性があるため、殺虫剤のみの散布は注意して行うこと。

・発病株や罹病が疑われる株は、定植苗には使用せず、本ぽへ持ち込まないこと。

・発病後は薬剤による治癒が困難であるため、定期的な防除による予防を心がける。激しい雨や台風など水滴が飛散しやすい状況の前後、親株からの切り離しなど株を傷つけるような作業後は重点的に防除を行う。なお、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行うこと。

●うどんこ病

・7 月以降、高温期は本病の生育が停滞し発生が終息したように見えるが、最高気温が 30℃を下回りだすと再び生育し始め、発生が順次増加する。多発すると防除が困難になりやすいため、育苗中から予防防除を徹底し本ぽへの持ちこみを防ぐ。

●コガネムシ類

・磐田市内２か所の予察灯における７月の誘殺数は平年並～やや多く、浜松市浜北区内１か所の予察灯においては平年より多く推移している。

●ハダニ類

・発生がみられるほ場では、薬剤散布を行う。育苗期に防除を徹底し、ハダニ類を本ぽへ持ち込まないように注意する。

【きく（施設）】

＜生育の概況等＞

生育は平年並である。

●黒斑病、褐斑病

予報の根拠

・７月下旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率 0.4%）。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが気温は平年より高いため、本病の発生を助長する（生育適温：黒斑病 24～28℃、褐斑病 20～28℃）。

防除対策

・本病は多湿によって発生が助長される。また、潜伏期間が長く発病後の防除では手遅れとなるので、多湿な条件が続く場合は薬剤の予防散布を行う。

・発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に持ち出して処分する。

●アザミウマ類（クロゲハナアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ）

予報の根拠

・７月下旬の巡回調査では、平均被害株率は 13.6%（平年 17.1%）と平年よりやや少なかった。

・１か月予報では、気温は平年より高いため、アザミウマ類の増殖を助長する。

防除対策

・開花期のきくは特にミカンキイロアザミウマの被害を受けやすいため、蕾の膜割れ時から発生に注意する。

【作物全般】

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

・県内３ヵ所（静岡市、御前崎市、磐田市）のフェロモントラップの調査によると、誘殺数は平年並～少なく推移している。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・初期発生に注意し若齢のうちに防除を行う。施設栽培では施設の開口部に防虫網を設置し侵入を防ぐ。なお、成虫の誘殺数データは静岡県病害虫防除所ホームページで提供している。

●オオタバコガ

予報の根拠

・フェロモントラップにおける誘殺数は、浜松市のキク産地２ヶ所（西区協和町及び伊佐地町）では平年より少なく、磐田市では平年並で推移している。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並であるが、気温は高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・例年８～９月は発生が増加するため、芽における被害の発生に注意し、初期防除に努める。

３　季節予報

●１か月予報　（東海地方　令和５年７月２０日　名古屋地方気象台発表）

【予報期間】　７月２２日から８月２１日

【予想される向こう１か月の天候】

特に注意を要する事項		期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。
向こう１か月	天候	平年と同様に晴れの日が多いでしょう。
	気温	平均気温は、高い確率７０％です。
１週目	気温	１週目は、平年並の確率５０％です。
２週目	気温	２週目は、高い確率７０％です。
３～４週目	気温	３～４週目は、高い確率５０％です。

【確　率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多％
１か月	気温	１０	２０	７０
１か月	降水量	４０	３０	３０
１か月	日照時間	３０	３０	４０
１週目	気温	１０	４０	５０
２週目	気温	１０	２０	７０
３～４週目	気温	２０	３０	５０

【予報の対象期間】

１か月　：　７月２２日（土）～　８月２１日（月）
１週目　：　７月２２日（土）～　７月２８日（金）
２週目　：　７月２９日（土）～　８月　４日（金）
３～４週目　：　８月　５日（土）～　８月１８日（金）

※ 利用上の注意

・気温・降水量は「低い（少ない）」「平年並」「高い（多い）」の３つの階級で予報します。階級の幅は、1991～2020 年の 30 年間における各階級の出現率が等分（それぞれ 33%）となるように決めてあります。（気候的出現率と呼びます）。
・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い（少ない）場合は「平年に比べて多い（少ない）」、また平年の日数と同程度に多い（少ない）場合には「平年と同様に多い（少ない）」と表現します。なお、単に多い（少ない）と表現した場合には対象期間の２分の１より多い（少ない）ことを意味します。

お問い合わせは
静岡県病害虫防除所　〒438-0803　磐田市富丘678-1
TEL 0538-36-1543　FAX 0538-33-0780
ＵＲＬ　https://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html